『社会の弁証法』理論をめざして

―― 三大陸の一社会学者のあゆみ ――

A・アブデルマレク著，熊田享訳『民族と革命』(446ページ)，『社会の弁証法』(401ページ) 岩波書店 1977年 (Anouar Abdel-Malek, *La Dialectique sociale*, Paris, Editions du Seuil, 1972, 479 p.)

宮 治 一 雄

はじめに
I 理論形成の3段階
II ヨーロッパ中心主義批判
III 「特殊性の理論」の探求
IV 「社会の弁証法」理論の構築
おわりに

はじめに

日本語版は，表記のように2冊に分けて刊行されたが，原著は18篇の論文を1冊にまとめて『社会の弁証法』の題名で刊行されたものである。

本書については評者が知りえたかぎりでも，すでにいくつかの紹介・批評が発表されている(注1)。それにもかかわらず，ここでもう一度論評を試みることにしたのは，かねてから評者がアブデルマレク氏の仕事に関心をもっていたという個人的事情に加えて，これまでに読んだ書評とは異なった視点から本書を読むことが重要であると考えるからである。評者がここで追求したいのは，つぎの三つの課題である。

第1は，著者自身が本書の成立事情にふれながら「まえがき」で示唆しているように「理論形成の過程を継起的なかたちでつかみとる」(『社会の弁証法』xivページ。以下では『民族と革命』を『民族』，『社会の弁証法』を『社会』と略記し，引用ページはとくにことわらないかぎり，訳書のページ数のみを示すことにする) という課題である。

第2は，やはり著者自身が示唆している「思想が，あらゆる試練のなかでもけっきょくただひとつの重要な，時間という試練にたえているかどうかを，みきわめる」(『社会』 xivページ) という課題である。

そして第3は，評者が原書ではなく訳書をとりあげることからいって，また本書の主題そのものからいって，理論が社会 (ないし文化) の差異という試練にたえているかどうかを，検討するという課題である。

書評という形式の制約から，また紙数の制約から，ここでは第1の課題に重点をおき，第2，第3の課題についてはVIで評者の暫定的結論を概括的に述べるにとどめたいと思う。

著者アブデルマレク氏については，「訳者によるあとがき」(『民族』431～432ページ) に述べられているし，評者もまた著者の主著『イデオロギーと民族再生――近代エジプト――への書評で述べたことがあるので(注2)，ここではくりかえさず著者の理論的関心の展開との関連で重要と思われる事実を以下で指摘するにとどめる。

ここで訳者と訳文についてふれておこう。熊田氏は本書の訳者としてもっともふさわしい人である。それは同氏が『砂漠に渇いたもの』(東洋経済新報社 1959年) と一連の「パリ通信」(藤村信名で雑誌『世界』に掲載) の著者であり，カイロ特派員として原著者が育ったアラブ世界の激動期を知り，しかも長い間のパリ生活で18篇の論文が発表された当時のフランスの思想動向にも通じているからである。訳語の選択について疑問をもった若干の箇所もあるが(注3)同氏ならではの卓抜な解釈から教えられた箇所のほうがはるかに多かった。決して読み易い本ではなかった原著が，同氏の達意の文章によって日本語で読めるようになったことは，最後に述べるような意味での「社会の弁証法」の発展にとってなによりも喜ばしいことである。

(注1) 『民族』のみについては，湯浅赳男 (『経済評論』1977年5月号 128～138ページ)，小谷汪之 (『歴史評論』 1977年8月号 87～93ページ) 2氏の書評を読んだ。また2分冊については，徳永恂「反西欧の民族ルネサンス論」(『エコノミスト』 1977年

7月5日号）84～86ページ，鶴見良行「比較解放学の試み」（『思想』 1978年2月号）135～144ページを参照。

（注2）『アジア経済』 第12巻第9号 1971年9月（110～114ページ）の宮治一雄書評。

（注3） たとえば「うつりゆくもの de transition」（『社会』 3ページ）→「過渡的なもの」（評者の案，以下同じ）。「試験的な概念装置 appareil conceptuel opératoire」（『社会』 60ページ）→「操作的……」。「《研究の地ならし terrain》」（『社会』 63ページ）→「《場》」など。

I 理論形成の3段階

理論形成の過程をたどるという視点から本書を読むためには，原書と訳書の構成から離れて，18篇の論文を執筆順に配列し直さなければならない。だが，これらの論文のなかには，学会などで口頭発表したものに手を加えたり，フランス語だけでなくアラブ語，ドイツ語，イタリア語などで何回か発表し直しているものがあるので，正確を期そうとすればそれは非常に難しい作業である。ここでは厳密な文献批判を避けて，原注と著者自身の作成になる履歴・業績一覧表(注1)にもとづいて，発表年順に暫定的に配列するにとどめ，本書に収録されなかった同時期発表の著作を念頭に置きながら，理論形成の階梯を大づかみにとらえることに重点を置いた。やや長くなるが，本書の構成紹介をかねて記せば，その結果はつぎのとおりである。論文の題名についで，カッコ内に発表年，訳書の分冊名と章，原書の部と章，の順に示した。原書全体のまえがきを第19論文とみなす理由は，説明するまでもないだろう。

1. 「アフリカ・アジア世界からみた植民地問題のヴィジョン」（1963年，『民族』 第1章，II－3）。
2. 「危機の東洋学」（1963年，『民族』 第2章，II－4）
3. 「アラブ世界における社会主義の問題性」（1962年，『民族』 第5章，II－7）
4. 「ロベスピエール，ジャコバン主義，エジプトの民族意識」（1967年，『民族』第6章，II－8）
5. 「三大陸における民族形成体の類型学――その素描――」（1967年，『民族』第3章，II－5）
6. 「民族発展の社会学――概念規定の諸問題――」（1967年，『民族』第4章，II－6）
7. 「イデオロギーの比較社会学をめざして」（1968年，『社会』第II部第4章，III－12）
8. 「マルクス主義と諸文明の社会学」（1968年，『社会』第II部第6章，III－5）
9. 「三大陸における軍隊とテクノクラシー」（1968年，『社会』第III部第8章，IV－17）
10. 「エジプトにおける民族ルネサンスの問題性」（1969年，『民族』第8章，II－10）
11. 「民族ルネサンスの概念――ひとつの社会学的案内――」（1969年，『民族』第7章，II－9）
12. 「マルクス主義と民族の解放――理論的問題の位置――」（1970年，『民族』第9章，III－13）
13. 「社会学における《歴史領域の深層》の概念について」（1970年，『社会』第II部第5章，III－14）
14. 「社会学と経済史――ひとつの媒介のこころみ――」（1970年，『社会』第3章，III－11）
15. 「社会理論の将来」（1971年，『社会』 第I部第2章，I－2）
16. 「帝国主義の社会学のために」（1971年，『社会』第III部第7章，IV－16）
17. 「民族国家における軍隊――権力についての社会学理論への寄与――」（1971年，『社会』 第3部第9章，IV－18）
18. 「理論構築の歴史的契機」（1972年，『社会』 第I部第1章，I－1）
19. 「まえがき」（1972年，『社会』 巻頭，同）

このような順序にしたがって，著者の問題関心の推移をたどるとともに，主題領域別に整理してみると，つぎのような三つの理論形成の段階，三つの主題群を抽出することができるように思われる。結論を先取りしていえば，これらの三つの段階は，著者のいう「理論構築の三つのモメント」（『社会』 54ページ）に照応しているのである。

まず第1の段階は，「ヨーロッパ中心主義」批判の段階であり，民族あるいは「民族性の現象 phénomène nationalitaire」（原書第II部の表題）が主要な主題領域となっている。第2論文（評者による上記の整理番号による。以下同じ）が，もっとも重要な位置を占めている。

つぎに第2の段階は「特殊性の理論」を探求する段階であり，アラブ世界とりわけエジプトの現実に即して，既成の（ヨーロッパ起源の）諸概念を組みかえるための作業を中心としている。第11論文，第13論文がとりわけ

重要であると思われる。

最後に第3の段階は「社会の弁証法」の構築をめざす段階であり，上記の作業を総括するとともにより普遍的な理論構築のための模索に入ったといってよい。第15論文，第18論文に注目するべきであろう。

以下では，このような三つの段階に分けて主要論文の紹介検討を行なうことにしたい。

（注1） Abdel-Malek, A., *Notice bio-bibliographique*, Paris, 1971, 13 p. (Ronéo).

II ヨーロッパ中心主義批判

1959年，ナセル政権に祖国を追われた著者は，ジャーナリスト，政治運動家としての生活から，亡命先のパリで研究生活に入ることになった。翌年から国立科学研究センター(CNRS)の研究員のポストをえて，著者は学位(第3課程の博士)を取得するためにエジプト現代思想史の研究に取り組むかたわら（その成果は後に『現代アラブ文学選——評論集——』(注1)として刊行)，エジプトの現代分析に力を注ぎ『エジプト——軍事社会——』(注2)を発表して人びとの注目を集めた。アルジェリア戦争の末期にあった当時のフランスで，植民地問題は最大の時事問題であったが，1940年代以降，レバント，インドシナ，アフリカと相ついで起きた民族解放運動に対して，フランス人が一種の被害者意識を抱いていたことは理解できるだろう。

第1論文「アフリカ・アジア世界からみた植民地問題」は，植民地問題に対するフランス人の視座を転換することを求めたものであり，三大陸（アフリカ，アジア，ラテン・アメリカ——順序に注意——を，著者は第三世界ではなく三大陸と呼ぶ）の立場から，脱植民地化を三大陸の主体性を回復する動きとして位置づけることを主張した。

ヨーロッパ中心主義の批判というテーゼを明白にうち出したものであるが，現在からみると第3論文「アラブ世界における社会主義の問題性」とともに，政治的独立がそのまま社会主義革命（当時の著者の見解ではすなわち人間の全面的解放）につながるかのような楽観主義的見解が目立つように思われる。両論文ともバンドン会議からおよそ10年間続いた脱植民地化のロマンチシズムの時代の産物である，といってよいだろう。

ヨーロッパ中心主義批判を系統的に展開した論文として注目に値するのが，第2論文「危機の東洋学」である。ヨーロッパにおける三大陸研究（とりわけ中東研究を主とする東洋学 orientalisme）をとりあげ，その人種主義的（ヨーロッパ至上主義的，あるいはその裏返しの家父長主義的）性格，非歴史的性格を批判したものである。それも第2次大戦以前の伝統的な東洋学だけでなく，J・ベルクの開講講義やイギリスのヘイター報告に代表される戦後の新しい東洋学，社会主義国における東洋学をも批判しているのである。東洋諸国の研究者による東洋学の発展（東洋学の発展的解消）こそ，著者が望んだ方向であった。同論文に対して，フランスのカーン，イタリヤのガブリエリなどの指導的東洋学者が東洋学の弁護に努めたが，著者の問題提起を理解した上での反論であるというよりは，科学至上主義と家父長主義の上に立つ自己弁護の色彩が濃いものであった。

第5論文「三大陸における民族形成体の類型学」，第6論文「民族発展の社会学」は，ヨーロッパ中心主義批判という点で上記の諸論文と同じ系列に属しているが，すでに比較・類型化の試みを通じて理論形成への第2の段階にむかう展望が明らかにされている。すなわち後者では，ヨーロッパの偏狭なナショナリズムと性格を異にする三大陸の民族運動の独自性を理解するために，三大陸については「民族性の現象」あるいは「ナショナリタリズム nationalitarisme」という表現を用いながら，ヨーロッパの経験から抽出された概念を三大陸に機械的に適用することも，三大陸の現実に目を奪われるあまりに民族ブルジョワジー，民族民主国家といった非科学的概念（これを試験的概念と呼ぶ）を用いることも拒否した上で，各民族の深層におよぶ歴史的分析の必要性を強調している。また前者では，三大陸の諸民族を四つの類型に分類することによって，新しいネイションの特殊性・多様性をとらえ，それを普遍的な枠組のなかで位置づけるための試みを行なっている。分類の指標は，ナショナルな統合の度合とその連続性であるが，エジプトのような「復活した民族国家」(『民族』 167ページ）との対比において他の諸民族を理解しようとしている点に，著者のいわばエジプト中心主義的な立場が明確にあらわれている。

第8論文「マルクス主義と諸文明の社会学」は，マルクス主義者もまたヨーロッパ中心主義的な三大陸観からまぬがれていない理由を，19世紀のマルクス主義が一国内の階級対立(これを著者は後に「内因性の要因」と名づける）のみを重視していたことから説明している。1917年のロシア革命をへて，マルクス主義者はようやく世界の単一性と異質性を発見し，1949年の中国革命によって

はじめて決定的な転換点を迎えた，と著者は評価しているが，研究史の整理はかなり表面的なものに終わっている。この段階では，諸文明の社会学（つまり「外因性のサークル」の研究）の構想が著者においてもいまだ明瞭になっていなかったのである。

（注1） Abdel-Malak, A., *Anthologie de la littérature arabe contemporaine—Les essais*, Paris, Le Seuil, 1965.

（注2） Abdel-Malek,A., *Egypte, société militaire*, Paris, Le Seuil, 1962.

Ⅲ 「特殊性の理論」の探求

1962年のアルジェリア独立とともに，フランスは長く続いた植民地戦争の重圧から解放され，1968年の5月革命の挫折にいたるまで脱植民地化のロマンチシズムの風潮のなかで，人びとは三大陸出身の知識人の発言を耳を傾けて聞いた。この時期に，著者はＣＮＲＳの主任研究員に昇進するとともに高等研究院（ＥＰＨＥ）で講義を担当しはじめ，各種の学会でさかんに発表を行なった。（第4論文，第6論文ほか）。たんに既存の理論体系を批判するだけでなく，実証研究を深めるなかで，みずからの理論体系を作りあげることに精力を注いだ。そのような作業の成果が著者の主著『イデオロギーと民族再生』であり，第10論文，第11論文，第13論文において，その大要を知ることができる。

第11論文「民族ルネサンスの概念——ひとつの社会学的案内——」は，学位論文（文学博士）の公開審査の際に著者が口頭で述べた要約説明であり，論文の執筆意図を陳述するだけでなく，著者自身の知的営為の軌跡について自由に語っているという点で，興味ぶかいものである。その意味で第11論文の副題は，「一社会学者の道程」と訳すほうがよかったのではなかろうか。

ここでは同書の結論部分にあたる第10論文「エジプトにおける民族ルネサンスの問題性」をもとにして，「特殊性の理論」の概要を述べておこう。諸民族の歴史の特殊性を認識するにあたって，出発点として重要なことは，問題設定であり，既成の概念装置によって三大陸の現実を恣意的に分断した上で，切りとった断片を分析するという（西欧近代科学に固有の）方法を拒否しなければならない。著者が設定した問題領域は，「近代エジプト」もしくは「エジプトのルネサンス(再生・復興)」であり，エジプトの「改新 novation と持続 persistance の諸要因」を抽出するとともに，それらの諸要因の「具体的な弁証法」すなわち現実の歴史過程における諸要因の相互関連とその変化を究明することによって，「エジプトの現実の特殊性をなしているものの核心に迫る」ことをめざしている（『民族』267～268ページ)。著者が「近代エジプトのルネサンス」という歴史過程の特殊性を説明する概念（しかも他の諸社会の歴史分析にも普遍的に適用しうる概念）として抽出したのは，「国家的共生 symbiose étatique」，「農業支配・植民地型の後進資本主義的な社会経済構成体 formation socio-économique capitaliste retardtaaire de type colonial à prédominance agraire」，「民族イデオロギーの対生 dichotomie des idéologies nationales」などである。政治・経済・イデオロギーの三つの次元における共生が持続し，「共生から総合への移行」が完結していないところに，近代エジプトにおける最大の問題性を見出している。この点からみて，著者の関心の根底にあったのが，国家的共生を支える主体としてのナセル政権に対する批判であったことはあまりに明白であろう。

第13論文「社会学における《歴史領域の深層》の概念」もまた，学位論文から導き出されたものであり，特殊性を解明するための概念として「歴史領域の深層 profondeur du champs historique」に着目すべきことを主張している。「歴史領域の深層」とは「諸文明における時間の表現様式」，つまり歴史認識にかかわる概念であり，「ひとつの民族社会を持続させる諸因子」（たとえば「下部構造」，「生命の再生産」，「国家と権力」，「時間あるいは宗教・形而学」）と，それらが持続する特殊な様式の検討を通じて，はじめて現実を歴史具体的に解明することができるのである。これらの認識を欠いた理念型的比較学と普遍主義的アプローチは，いずれも還元主義の名のもとに断罪されている。

第12論文「マルクス主義と民族の解放」は，三大陸の民族解放に対する国際共産主義運動の政策態度に批判を加えたものであるが，著者の理論形成との関連ではほとんど重要性をもたないと評者は考えている。

Ⅳ 「社会の弁証法」理論の構築

『イデオロギーと民族再生』によって，フランス学界に確固たる地位を築いた著者は，1971年にＣＮＲＳの研究教授に就任し，国際社会学会を舞台に研究組織者としての役割を積極的に果たすようになった。だが，それとともに学界・文化界からの風当りも次第に強くなった。その背景は，一般的にいえば脱植民地化のロマンチシズムの時代の終焉であり，とりわけエジプト出身の著者にとっては1967年戦争の敗北とナセル主義の後退に加えて，

シオニスト文化攻勢の激化という厳しい状況が不利に働いていた。また一般に三大陸出身の研究者がフランスで活動の場をえた場合，出身国や関連地域の特殊問題を研究し，その成果をフランス語で発表するという役割（ようするに情報提供者＝インフォーマントないし翻訳者としての役割）を果たしているかぎりにおいて，彼の存在は許容され，ときには珍重される。だが，ひとたびその限界をこえて，西欧出身者と競合関係に立つ分野（たとえば理論研究）に足を踏み入れると三大陸出身者はさまざまな形での敵意・反感に直面しなければならない。著者が，特殊性の理論の探求から普遍的理論の構築にとりかかった時期には，著者もまたそのような空気を感じていたのではなかろうか。

第15論文「社会理論の将来」は，これまでに述べてきた著者の理論的構想を整理して展開したものであり，「特殊性と普遍性の弁証法」と名づけられた普遍的理論構築のための見取図が明確に示されている。「批判」「標定 repérage」，「総合」の各段階における理論構築の作業を提示するなかで，批判的歴史主義つまり創造的マルクス主義に立つ著者自身の立場がくりかえして強調されている。

第16論文「帝国主義の社会学のために」と第17論文「民族国家における軍隊——権力についての社会学理論への寄与——」を，著者は，第9論文とともに「権力の社会学」（原書第Ⅳ部）と呼んでいるが，新しい領域というよりはむしろ特殊性の理論の延長線上に位置づけるべきものであり，帝国主義と軍隊を三大陸の民族運動との関連において論じている。

著者にとって真の意味での理論構築の模索は，第18論文「理論構築の歴史的契機」によって開始された。第19論文，つまり「まえがき」とともにここではじめて，「社会の弁証法」の構想が示されるのである。一般的にいえば「社会の弁証法」とは，社会の運動・発展の法則にかんする科学であるとともに，社会の運動・発展の過程そのものである。著者もまたそのような意味で「社会の弁証法」という言葉を用いているが，著者はそれを大別して諸階級・諸社会集団の弁証法と諸民族・諸文明の弁証法という二つの領域に分けている（ここで著者が「歴史の弁証法」と相互補完的なものとして，しかも「歴史の弁証法」が軽視していた問題に照明をあてるために，「社会の弁証法」という表題を選択したことがわかるだろう）。前者は「内因性のサークル cercles endogènes」後者は「外因性のサークル cerlces exogènes」と名づけられる。著者によれば「現代世界の動きは，この二つのサークルによって構成されている」のであり，一元化していく世界の動きにかんする総合的理論としての「社会の弁証法」は，「二つのサークルに働く相互作用の網の目を研究する」ものでなければならない（『社会』ix～xページ）とされている。

ところで，以上のような『社会の弁証法』を作りあげる上で，本書に収録された18篇の論文はそれぞれどのような点で寄与することに成功しているだろうか。著者自身もまた，現実としての「社会の弁証法」が進行中である以上，理論としての「社会の弁証法」が完成するはずはないことを十分にわきまえている。だからこそ本書を『社会の弁証法』第一巻と呼んだ（『社会』ixページ）のである。評者もまたこれまでの作業のしめくくりをつけるとともに，将来にむけての展望として，上にのべた三つの視点から本書全体の概括的評価を試みることによって，この論評のむすびにかえることにしよう。

おわりに

第1の視点，すなわち著者がどのような理論形成の過程をたどったかという点は，すでに示したことから明らかになったと思う。ヨーロッパ中心主義批判から，特殊性の理論の探求にむかい，ついで普遍的な理論構築を試みる，という過程は，社会学者としての著者の道程をそのまま示すものである（著者にとって社会学とは，人文・社会諸科学の科学，歴史哲学である）。自国の歴史と現状の研究から出発し，そのなかで必然的にヨーロッパの現実から抽出された概念装置に疑問を抱き，その批判を試みるに至った，この第1段階での著者の仕事は，三大陸が政治と経済の領域においてヨーロッパの支配から脱却するという歴史的課題の遂行に並行して，文化の領域においても自らを解放し，主体性を回復することをめざすものであった。著者の批判の対象が，ヨーロッパ人だけでなく，ヨーロッパ中心主義の呪縛から逃れることができないでいる三大陸の人びとにも向けられていたことは明らかである。各民族の歴史の特殊性を探究すること（理論構築の第1のモメント）は，後に述べるように三大陸の研究者が誰もが試みることであり，著者もまた学位論文において同じ作業を行なったが，著者の独自性は，特殊性の認識にとどまらず特殊性の理論の探求という形式において，歴史理論の再検討にとりくんだことであろう。ところが理論形成の第2の段階（あるいは理論構築の第2のモメント）に入ると，第1の段階とはまったく異質で異次元の困難が生ずるはずである。「国家的共生」

にせよ「農業支配・植民地型の後進資本主義的な社会経済構成体」にせよ，それがエジプトの歴史から導き出された概念であるだけに，エジプトの歴史を認識する上で有効なことはたしかだろう。だが他民族の歴史を認識する上ではどのようなことがいえるか，という点を著者は十分に検討していない。同じアラブ世界でも著者の念頭にあるのはもっぱらエジプトであり，シリア，マグレブなどには第3論文で言及しているものの，それぞれの史実に十分通じているようには思われない。「水利社会」の概念から「国家的共生」を説明しうるのは，アラブ世界ではエジプト以外にイラクぐらいのものだろう。また「ナショナルな統合の度合とその連続性」を尺度として諸民族を分類するというのも(第5論文)，あまりにエジプト中心主義的であり，著者自身の「歴史領域の深層」概念を十分に駆使しているとはいえない。たとえナショナルな統合の歴史が浅くとも，短い期間に深層におよぶ変化を通じて高度の統合に成功した民族もあるのである（たとえばアルジェリア)。

類型化や比較という「理論構築の第2のモメント」においては，比較の枠組になる基本概念の規定が重要であるが，著者の理解に評者として疑問を抱いた点もいくつかあった。たとえば著者は，一方ではウィットフォーゲルの「水利社会」概念を十分に批判せずに用い（第10論文)，他方では「アジア的生産様式」概念を十分に吟味することなく，「ネオ教条主義」としてしりぞけている(第7論文)。また「農業支配の à prédominance agraire」という概念も「農業部門の生産高ないし雇用量が他の部門よりも卓越している」ということのようで，必ずしも「土地所有のあり方が社会を基本的に規定している」ということではないようである。

このような理論構築の難しさは，著者自身が切実に体験したことであり，第3の総合の段階（理論構築の第3のモメント）にいたると，ひとたび「社会理論の将来」のきわめて明快な展望を示しながら（第15論文)，みずからそれを批判しつつ新しい理論的な模索に取りかかっている（第18論文)。この段階の著者にとって必要だったのは，ふたたび第2，第1の段階を逆にたどり，エジプトの現実に立ちかえることではなかったのだろうか。すなわち，ナセル以後のエジプトの現実を直接に観察し，そこから新しい理論構築の糧を摂取するということである。政治亡命者であるかぎり，それはむろん不可能なことであった。

1974年末にサダト大統領がフランスを訪問した際，在ヨーロッパ・エジプト人亡命者によって，政治犯の釈放と民主主義の回復を求めた声明が発表された。当時アルジェリアにいた評者は，声明文の署名者のなかにアブデルマレク氏の名前がないことから（たとえばサミール・アミンは署名に参加した）やがて帰国の日が近いことを予測したことを記憶している。はたしてその後しばらくして，同氏がエジプトの土を踏み，長い間の流謫生活に終止符を打ったという噂を聞いた（しかし生活の本拠はいぜんとしてパリに置き，カイロのアインシャムス大学へは客員教授として短期間出講しているだけである)。同氏がサダト政権との和解を決意した理由はいまだに聞きかねているが，1973年戦争以後サダト政権が知識人との宥和政策を進めたことに好感をもったという理由よりはむしろ，理論構築の新しい可能性を追求するためにエジプトの大地にふれたかったからだと，評者なりに考えている。同氏がエジプトの現状分析から透徹した「サダト政権論」を発表し，あらためて理論構築の作業にとりくむことを期待している読者は，ひとり評者にとどまらないのではなかろうか。

つぎに第2の視点，すなわち本書に収録された諸論文がはじめて発表されてから，15年ないし7年を経過した現在でも，いまなお時間の試練にたえて価値をもっているかどうか，の検討を簡潔に試みておこう。時間の試練とは，実証分析・現状分析家にとって，まことに苛酷なものであり，いかに精緻な研究であろうと，現実が分析に反した展開をみせることはあまりに多い。三大陸の現実の変化もまたこの10年数年間にきわめて急激に進み，三大陸の「ナショナリタリズム」は，もはやほとんどの場合「ナショナリズム」に転化してしまったように思われる。「ナショナリタリズム」もまた「試験概念」にすぎなかったことが明らかになったというべきだろう。したがってはじめの頃著者が示したいくつかの見解は訂正されなければならない。しかしながら，この論評の主たる関心である理論的形成と理論的貢献という点からみると，今なお本書は時間の試練にたえて立派な存在意義をもっている。いうまでもなく著者が提示した概念装置は，批判的に再検討され，再標定されなければならないし，新しい現実にもとづいた総合があらためて行なわれなければならない。しかしながら，まさにそのような批判的作業こそ，著者が本書で定式化した理論構築の作業の一環にほかならないのではなかろうか。既成の理論体系に盲従するのではなく，つねに新しい現実，進行しつつある社会の弁証法に即して理論構築を試みようとするもの

にとって，本書がいまなおすぐれた手引の書であることはうたがいない。

最後に第3の視点，すなわち原書が対象とした読者と異なって，日本語でものを考える人びとにとっても社会と文化の差異をこえて，本書が同じような理論的役割を果たしうるかどうか，の検討を試みておこう。評者にとって本書のフランス語版が読み易くなかったことは，すでに述べたとおりである。とりわけ本書の諸論文のなかでも主として理論的問題を扱っているものは，表現形式の差異にもとづくとまどいから一層難しく感じられた。ところが日本語版によって本書を通読してみると，それとはまったく異なる印象を抱いた。

すでに鶴見氏は，前述の書評論文においてフィリピンのコンスタンティーノと本書の著者との共通性を指摘している。第三世界の自己主張，相対化の試みとしての共通性，関心の一貫性，マルクス主義の圧倒的な影響という共通性など，である(注1)。評者もまたアジア・アフリカ出身の他の理論家たちについて同様の感想をもっているが，それだけでなく日本の歴史学者が直面してきた理論的な諸問題との共通性に強く印象づけられたのである。「ヨーロッパ中心史観」の批判，世界の諸民族の歴史における特殊・具体性の重視など，1950年代に日本の歴史学者（たとえば上原専禄教授など）は，本書の主題と同じ主題に取り組み，基本的には著者と共通の方向性をもつ結論に到達していた(注2)。

さらに本書で提示された基本的概念についても，日本の歴史学に固有と考えられがちな諸概念と照応関係にあるものが多いことは明らかである。たとえば「国家的共生」と「天皇制」，「農業支配・植民地型後進資本主義」と「半封建的資本主義」，「民族イデオロギーの対生」と「上からの近代化の不徹底性」などである。日本とエジプトにおける歴史認識の共通性の背後には，両国が置かれた歴史的条件の共通性があることはいうまでもない。著者のエジプト中心主義に対して，評者は日本中心主義（ないしマグレブ研究に従事しているがゆえのマグレブ中心主義）の立場に立っていることを自覚しているが，評者からみると，もしも著者が当時から1950年代の日本歴史学者の動向，さらには1920年代以降の日本資本主義論争史に通じていれば（現在ではいずれについても著者の理解は大きく前進している）比較研究・類型化をめぐる著者の理論的枠組は一層精緻なものになっていただろうと思われてならない。逆のことはむろん日本の歴史学者についてもいえるのであり，モハンマド・アリー以降のエジプト近代史とエジプト史学界の動向に早くから通じていれば，天皇制や日本資本主義の半封建的性格について，より明確な理論的見通しをもてたのではなかろうか。これまで日本の歴史学者は，ヨーロッパ中心主義批判の理論的作業を行なう際，著者のような三大陸の歴史理論家にくらべると，あまりに自国の特殊性とヨーロッパ起源の理論のみに視点を限定しすぎており，その上で両者の不整合性にのみ注意をむけていた傾向がある。自国の歴史の特殊性をそのまま，普遍性と対置していたのでは，いつまでたってもヨーロッパ起源の普遍的理論のヘゲモニーをくつがえすことはできない。自国の特殊性そのものではなく，著者が本書で試みたように特殊性から抽出され，しかも一般化への見通しを通じて抽象度を高めた「特殊性の理論」をつくりあげることがまず必要である。ヨーロッパの文化的ヘゲモニーは，政治，経済的ヘゲモニーを背景とし，またまさに政治，経済的ヘゲモニーと同様に，三大陸を分断すること（つまり「分割して統治する」こと），三大陸相互の直接的コミュケーションを妨げること（たとえばヨーロッパ語を媒介にせざるをえないような状況を押しつけること）によって維持されてきた。したがってそれを克服するには，それらの「特殊性の理論」を相互につきあわせて比較検討する（著者の用語では「標定」）することが必要である。ヨーロッパ人もまた当然自らの歴史の特殊性を主張する権利をもつのであるから，ヨーロッパ起源の「特殊性の理論」（これまで普遍的理論としばしば混同されてきた）もまた，他の「特殊性の理論」と同様に比較検討の対象になることはいうまでもない。これらの作業を通じてはじめてヨーロッパ起源の理論よりも一層抽象度が高く，より普遍的な現論的総合への道が開かれるのである。そのような総合にいたる方法が本書で示された「社会の弁証法」であり，それは日本の歴史学者と，それ以上に日本的特殊性とヨーロッパ起源の理論に埋没している日本の社会学者にとって，新しい理論的地平を開くための見通しを与えるものであると思われる。

本書の日本語版の刊行は，まさに以上のような意味で三大陸と日本の間の交流の実践例であり，現実に進行しつつある「社会の弁証法」の一環として位置づけることができるのである。

（注1） 鶴見　前掲論文　135ページ以下。

（注2） 成瀬治『世界史の意識と理論』岩波書店 1977年，とくに第3章を参照。

（アジア経済研究所調査研究部）